

新島先生はこの年の三月、品川沖から快風丸に乗られて、北上された。三月十二日から、函館着の四月二十一日まで、四十日もかかっていられる。その間、船は何度も暴風雨に会ったらしく、あちこちの港に寄っている。砂子浦、仲の柵(今の中ノ作)、鍛ヶ崎など。この鍛ヶ崎は宮古湾の北にある小さな漁港で、先生はここに六日ほど泊られた。先生は船上から、この荒あらしい岩壁を見つめ、どのような夢と情熱を投げつけていられたことだろう。

私は普代で陸に上り、バスで久慈に向った。バスから海岸線の山々が赤茶けて見えた。昨年、大きな山火事がこの地方一帯に起って、赤い山肌はそのあとなのだ。一昨年は津波が襲って、どの入江の漁村にも哀話の一つや二つは残っている。津波があれば人びとは山に逃げ、山火事があれば海に入り、首までつかって、難を避けたという。久慈の宿は静かな町外れにあった。広い宿に泊り客は数人しかいない。庭の芝草の上に寝ころぶと、吹きわたる風も、空の青も、もう秋のものであった。私は野辺地から下北半島を北へ向い、恐山へ廻った。ここは北の果の靈地で、子を失っ

た母達が巫女の媒介によって、冥土から亡き子の魂を呼び招くためにお参りをする。潤葉樹に包まれた美しい山湖の片隅に、硫黄くさい灰色の岸辺がある。この辺だけが病み朽ちたような異様な風景をつくっているのだが、

みちのく抄

那須 乙郎

中尊寺

金色の闇ほのぼのと朝の蟬

毛越寺址

石組のわづかにのこり秋燕

啄木出生地

野分立つ雲に肩欠け南部富士

小岩井

秋風の仔馬顔よせ愛撫待つ

八戸鮫角岬

海に没るまでの日のいろ雁わたる

ここに恐山の寺がある。冬の季節にでも来れば、その不気味さに身も氷る思いがするであらう。

私は山を降って、汽車で大畑へ、さらにバスで下風呂に走った。下風呂にある幾つかの宿の中、思い切って一番古く大きな宿を訪ねた。一人客は断わられることを覚悟したが、都合よく一部屋が空いていて、快く通された。新島先生は四月十八日と十九日に、この下風呂温泉に泊られた。その当時は霜風呂と書いたらしい。先生が入湯されたのは、あるいはこの宿の湯であったかも知れない。夜、湯舟につかりながら、ガラス窓を通して、沖を眺めた。星明りの空の下に、遠く低く、黒い山影が水平線に尾を引いている。北海道の函館の辺の山の稜線である。砂粒のような灯が明滅している。港の灯であろうか、それとも漁火であろうか。新島先生はこの灯を焼きつくような思いで眺められたことであろう。その昔をしのびつつ、私もその灯をあかすに見つめていた。けたたましい声が空を渡った。海鳥の声である。海峡を渡る鳥の声は、心に喰い入るほどわびしかった。

(中学校長)